

第7章 文字、写真・図などの編集方針

■ 1. 文字データの編集

1. 1. 基本事項

・文字データについて、基本的には、原本の文字列に関して手を入れないことが大原則であるが、修正を要するものとしては、以下のようなものが挙げられる。

・「右の図の～」 「下の写真の～」 など他の要素を示す際は、拡大本でのレイアウトの状況に合わせて「次ページの～」などと表記する。またページ数で明確に示すことが出来る際は「7-2 ページの～」など、拡大本の実ページ数での表記にする。

・作成する各教科書で句読点の種類を統一する。今回の社会と理科の教科書については、全て、句点は「。」 読点は「,」に統一した。

・文末の改行位置は、文字列の続き具合から、読みやすさを考慮し、文節や単語単位で区切るなど、適宜変更することも考慮する。

・様々な見出しについては、改行の行頭をそろえる。

・短い項目の羅列では、横並びの項目数を増やすことで、行数を少なくし、間延びをなくす。

・章の表題や本文中の太字の語句などの強調表現については、単に強調処理を行うと、線間が狭くなるために文字が分かりにくくなる場合がある。そこで、その強調表現のために、もともと線が太くて、かつ分かりやすいフォントを使うなどの配慮を行う。

今回の社会と理科の場合には、もともと線が太くて分かりやすい「平成ゴシック W7」を用いた。(102 ページ) (104 ページ)

・「+」「-」「・・・」「- (ハイフン)」などの記号は、誤読を防ぐために前後の文字との間隔をあけるなど、その間隔に注意する。(105 ページ)

・目次などで点線と数字など文字が連続する場合、点線と数字などとの間に間隔をとる。(44 ページ)

・ルビの長いものについて、漢字のマス間をルビの長さに合わせて大きく空けると見にくいので、多少空けるにとどめる。(106 ページ)

・ルビのある行の行間は広めにとり、原則としてルビのない行の行間も同じ広さにする。ただし、その設定は段落ごとにする。(106 ページ)

- キャラクターのせりふなど、吹き出しの中の文字は、原本の示し方にかかわらず、本文と同じ横書きを原則とする。(108 ページ)

1. 2. 文字の背景にかかわる処理

- 文字の背景については、ノイズとなって文字が見えにくい背景はとることが基本である。

- 文字の背景に色アミが付いていて、文字が見えにくい場合は、背景色をとって、同色系の濃い色の線で囲む。(110 ページ)

 キャラクターのせりふの地の色についても同様の処理を行う。(112 ページ)

- 白抜き文字は黒文字にする。(115 ページ)

- 影付きの文字は、その影をとり、通常の文字とする。(118 ページ)

- 注意を示す部分が赤い文字で書いてあるところがあるが、赤文字は見えにくいので、この場合は、黒文字にしたうえで、赤枠で囲むようにする。(120 ページ)

■ 2. 写真と図の編集

2. 1. 写真と図に共通の事項

- 写真、図の表題や説明文は、写真、図についての理解を先に行うことができるようにするためにできる限り写真、図の上部左にレイアウトする。

- 写真、図の前後に本文がある場合は、写真、図の表題や説明文と本文の区別が付くように写真、図と表題や説明文のブロックを一つの罫線で囲む。(122 ページ)

- 今回の製本はリング製本で、ページ見開きの境目部分がリングで部分的にかくれる。そこで拡大本の見開きにまたがる写真、図のうち、ページの境目にも重要な情報がある写真、図は、製本時にその境目の余白を取って左右のページに配置する。(124 ページ)

- 写真、図の中に表示されている文字はそのままでは背景がノイズとなって見にくいので、原則として白色の長方形による背景をつけて、拡大した黒文字で打ち直す(白マド黒文字)。(128 ページ)

ただし、そうすると背景部分のもともとの表示が妨げられる場合は、長方形ではなく「白エッチ」(文字の輪郭に沿って白色背景をつける技法)を用いる。(130 ページ)

2. 2. 写真の編集

- 写真のコントラストは原則として原本のとおりにすることとして、強調しない。

- ガラス容器、セロハンテープの写真など透明なものは、境界が明確になるように出来る限り輪郭(縁)を実線で追記する。(132 ページ)(134 ページ)

- 写真が重なるところは、個々の写真の区別がつくように白枠を付ける。(136 ページ)

2. 3. 図の編集

- 引き出し線、図中のコメントは太めに書き直す。(138 ページ)

- 薄い背景色上の薄い色の図版などは、輪郭が判別できるよう太い縁を追加する。(140 ページ)

- まぎらわしいグラデーションは削除し、均一の色にする。(142 ページ)
- 乾電池など方向に意味があるものについては、太い輪郭線で向きを強調する。(144 ページ)
- 分かりにくい矢印は、矢の先端および方向が分かるような強調を施す。場合には、他に分かりやすい矢印を追加する。(146 ページ)
- 見開きページにまたがる矢印については、見開きのページごとに矢印を二つに分割するか、1 ページの1 つの矢印だけでも理解できる場合は、1 つの矢印にする。(149 ページ)
- スケール入りの地図を拡大する際は、スケールと地図の拡大率が同じになるように注意する。(152 ページ)
- 手書きのイラスト、表などは、文字などの打ち直しをせず、基本的にそのまま拡大する。(154 ページ)
- 横配置の流れ図を縦配置の流れ図にすることで、1 ページに収まるのであれば、縦配置に変えることも考慮する。(156 ページ)
- 原本の図表では拡大しても情報が伝わらず不十分であるが、学習上重要なものについては、別ページに読みとりを補助するページ（情報を整理してテキストだけにしてノイズをへらし図表を見やすくしたものなど）を挿入することも考慮する。(158 ページ)